神戸市芸術文化活動助成対象事業

神戸男声合唱団
第47回定期演奏会

2024年10月20日(日)

神戸文化ホール(大ホール)

KOBE MALE CHORUS

主催：神戸男声合唱団　後援：兵庫県・神戸市・神戸市教育委員会・(公財)神戸市民文化振興財団・兵庫県合唱連盟・神戸新聞社・サンテレビジョン

南イタリアの壁たち

Stage 1

松下 耕
若い世代への賛歌

明日に向かい 新しい歌を

どれもみずみずしい音楽に満ちている。テキストは古い聖句なのに、新しい音楽がその上を思いのままに舞っている。しかも初演したのは若者たちだった。教会の祭儀ではなく学生たちのコンサートのために書かれたのだ。だから宗教曲というよりは、若い世代に向けた「新しい賛歌」だ。合唱ばかりではない。ピアノも彼らと共に躍動する。これはもう「伴奏」とは呼ばない。ピアノと合唱の、これは真剣なディベートなのだ。

たとえばSanctusのピアノの序奏。目を閉じれば、鏡のように凪いだ海がまぶたに浮かんでくる。それに続く合唱は風が運ぶメロディだ。時折白い波がさわさわと寄せてくる。穏やかだ。

作曲者は言う。「この曲が出来上がったのは東日本大震災のその日、あの時間の2時間ほど前だった」

そして不幸にして、この序奏は犠牲者のための祈りとなった。穏やかな海は、何気ない日常の寓意となった。平穏な日常がどれほどありがたく、大切なものなのか、あの時私たちはいやというほど思い知らされた。

教会のミサではSanctusは「感謝の賛歌」と呼ばれる。ならばこのSanctusは今日という平和な一日への感謝の賛歌だ。

Ave MariaもSanctusとほぼ同じころに、「特に若い人たちのために」作られた(1)。きっと初演の若者たちは身体全体に音楽を感じて歌ったことだろう。まるでラテン音楽を歌うようにして。曲冒頭にはルネサンスの作曲家アルカデルトへのオマージュとして、有名なAve Mariaが据えられている。とても静謐だ。天使が神の命をマリアに告げに来た時もこのような静かな午後だったろう。しかしその後が違う。先を争うようにして合唱とピアノが互いにテーマを織りなしてゆく。伝統的な祈りの句は躍動的なリズムで新しい命を得る。

天使はマリアに新しい命の誕生を告げに来た。だからAve Mariaは「いのちの賛歌」だ。躍動的なのは本来当然なのだ。喜び躍るような音楽こそAve Mariaにふさわしい。

（1）両曲とも震災直後の2011年5月、東京六大学合唱連盟の合同演奏として作曲者自身の指揮で初演。

Cantate Dominoは前の2曲に先立って、震災の数か月前に誕生した(2)。そして震災後にはアメリカで始まった被災地支援のチャリティ活動のための楽曲となり、これもまた震災と深い縁を結ぶこととなった。そしてその活動が世界に広がり、曲も国境を越えて被災地への祈りの歌となった。

（2）オリジナルは女声合唱曲として2010年11月初演。男声版は2011年3月に完成。奇しくも東日本大震災との結びつきを深めた。

Cantate Dominoとは「主に向かって新しい歌を歌え」という旧約聖書の一節。「新しい歌」はまさに「再生」と「復活」への応援歌だ。さらに詩篇は続く。「天よ、喜び祝え、地よ、喜び躍れ。海とそこに満ちるものよ、とどろけ。野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め」これは壮大なスケールの「天と地の賛歌」でもある。ここでもピアノが堂々とその勇壮なテーマを提示し、合唱がそれに相和す。

ときに大災害をもたらす天と地。しかし私たちはそこに生かされてもいる。

「平和への感謝」「いのちの喜び」「天と地への畏敬」、3曲を通じて作曲者がこれからを生きる若い人たちに歌ってほしかったのはこのことだったんじゃないかな。

さて私は、また風になって、この大きな空を吹き渡っていくことにしよう。「新しい歌」が能登の被災地にも響くことを願いながら。

松下　耕：1962年生まれ。国立音楽大学作曲家を首席卒業後ハンガリーに留学。「合唱団の耳を育てる」ことに主眼を置いた多くの合唱曲を発表。日本の合唱界を牽引する作曲家の一人。2001年に「耕友会」を結成、多くの合唱団の指導者として演奏活動も精力的に行っている。

Sanctus
サンクトゥス

聖なるかな
聖なるかな
聖なるかな

万軍の神なる主
主の栄光は天地に満つ

天のいと高きところに
ホザンナ

誉むべきかな
主の名によりて来たる者

天のいと高きところに
ホザンナ
（旧ミサ典礼文）

Ave Maria
アヴェ・マリア

アヴェ・マリア
恵みに満ちた方
主はあなたと共におられます
あなたは女のうちで祝福され
ご胎内の御子イエスも
祝福されています

神の母　聖マリア
私たち罪びとのために
今も　死を迎えるときも
お祈りください
アーメン
（アヴェ・マリアの祈り）

Cantate Domino
カンターテ・ドミノ

新しい歌を主に向かって歌え
全地よ　主に向かって歌え
主に向かって歌い　御名をたたえよ
日から日へ
御救いの良い知らせを告げよ

大いなる主　大いに賛美される主
神々を超えて　最も畏るべき方
諸国の民の神々はすべてむなしい
主は天を造られ
御前には栄光と輝きがあり
聖所には力と光輝がある

天よ　喜び祝え　地よ　喜び躍れ
海とそこにあるものよ　とどろけ

新しい歌を主に向かって歌え
（詩篇96より　新共同訳）

Stage 2

ええ演歌は永遠か…

～歌い継がれる歌づくし～

演歌は時代の水鏡

「隠居はん、いてはりまっか」
「なんや、せいやんやないか。町内一の色男がどないしたんや」
「色男やおまへんがな。わて、ここんとこぶらぶらしてましてな、ムショクでんねん」
「おもろいやないか。わざわざそれ言いに来たんかいな」
「ちゃいまんねん。実は、今度町内で『演歌カラオケ大会』ちゅうもんがおましてな、それやったらわても喉には自信があるさかいに、ほないっぺん出てみよか、思うたのはええけど、演歌ゆうても何を歌うたらええのかわかりまへんねん」
「なるほどな。その選曲をどないしょうと…」
「いや、千曲もいらん。一曲でよろしねん」
「違うがな。ほな聞くがな、そもそも演歌はなんで『演歌』とゆうか、あんた知ってるか」
「はて、どないゆうたらえーんか…」
「洒落で誤魔化すところをみると知らんねんな。いやいや、知らんのも無理はない。えらい昔のこっちゃ。明治維新のあと、政府のやり方に反対して民権運動というものが起こったんや」
「えっ、ビリケンさんが怒った…」
「ビリケンやない、民権や。初めは演説大会やったのが、妨害やら取締りがきつうなったんで外へ出て辻説法のようなことを始めたんやな。それも節回しをつけて自由民権を説いた。演説が歌になったんでこれを演歌とゆうた」
「ほたら、初めはえらい固いもんやったんで」
「そや。そのうちだんだん柔らこうはなったものの、所詮は昔からのお座敷歌やら浪曲やらとえろう変わらへん。演歌ががらっと変わったんは、大正時代になって東京音楽学校出の中山晋平という人が西洋音楽を取り入れてからや」
「西洋風に料理したさかいにフォークソングになったん…」
「そやないがな。西洋音楽と古来の日本の音感をミックスしたんや。ほれ、あんたも知ってるやろ『船頭小唄』(1) 〈おれは河原の

中山晋平（1887～1952）

枯れすすき…〉物悲しいを通り越して、ほとんど悲劇的やな。ちょうど関東大震災もあって世の中気分が落ち込んだところにヒットした。せやから今でも記憶に残ってるし、その後の演歌のお手本になったんや」

「そないゆうたら『昭和枯れすすき』(2) 〈世間に負けた〜〉てな歌、ありましたなあ」

「そんだけ元歌の命が長いゆうことや。長命ということなら古賀政男の『酒は涙か溜息か』(3)も長いで。ギターの調べでおなじみやろ。あれは昭和大恐慌が背景やった」

「道理で歌が暗いはずやわ」

「それから長い戦争が始まって、演歌も酒やら恋やらゆうてられへん。ようやく戦争が終わって今度は明るい歌が世の中元気にする中で、古賀政男も『湯の町エレジー』(4)で復活した。しかしそれだけやない。戦後の古賀メロディーの行きつくところはやっぱり美空ひばりの『悲しい酒』(5)やった」

「なるほど。ほたら、古賀政男は戦前、戦後にまたがって息の長い歌を残したんでんな」

「そや。古賀政男が演歌の流れを変えた２人目や。ところが戦後は経済成長で世の中みんな上を向いて歩いとる。暗い、悲しい、怨み、辛みは流行らんようになる。若者は演歌なんかお呼びやない。グループサウンズ全盛時代も来る。そこへ現れたんが阿久悠や」

「かくゆう、わてが、あくゆうや…とかゆうて現れた」

「阿久悠は作詞家やけど、単に歌を作るだけやのうて、ヒットという現象を作ったんや」

「ヒット騒がせでんなあ」

「決まった作曲家、決まった歌手だけと組むんやなしに、歌によって組合せを変えもって、歌の世界全体を描いていく。時代はテレビもカラオケも有線放送も全盛期や。あらゆる手段を使うて、ピンク・レディでも森昌子でも、POPSでも演歌でも何でもヒットさせる。その後のアイドル・ビジネスの元祖になったんや」

「そういえば『スター誕生』ちゅうテレビがおましたわ」

「それまで定番やった『怨念』『忍耐』『自虐』『不幸』から演歌を解放したんやな。**『津軽海峡・冬景色』**(6)を見てみ。『女』は捨てられるもんやなしに、男の住む東京を捨ててくにへ帰る『女性』に立場が逆転した。言葉遣いも昔ながらの七五調やなしに、『うえの』『はつの』『やこう』『れっしゃ』とすでに3連音符になっとる」

「なるほど、同じ演歌でも以前とはだいぶん変わりましたなあ。ほたら**『雨の慕情』**(7)はどないでんねん」

（1）野口雨情作詩　中山晋平作曲
大正11年　原題は「枯れすすき」
昭和46年藤圭子がカバーして再びヒットした。

(2) 山田孝雄作詞　むつひろし作曲
歌：さくらと一郎　昭和49年

(3)高橋掬太郎作詞　古賀政男作曲
歌：藤山一郎　昭和6年
その後多くの演歌歌手がカバーした。

(4野村俊夫作詞　古賀政男作曲
歌：近江俊郎　昭和23年

(5)石本美由起作詞　古賀政男作曲
歌：美空ひばり　昭和41年

古賀政男（1904〜1978）

(6)阿久悠作詞　三木たかし作曲
歌：石川さゆり　昭和52年

(7)阿久悠作詞　浜　圭介作曲
歌：八代亜紀　昭和55年

阿久悠（1937～2007）

(8)高田直和作詞　梅谷忠洋作曲
歌：小林幸子　昭和54年

(9)いではく作詞　遠藤　実作曲
歌：千　昌夫　昭和52年

(10)なかにし礼作詞　中村泰士作曲
歌：細川たかし　昭和57年

(11)荒木とよひさ作詞
三木たかし作曲
歌：テレサ・テン　昭和62年

(12)吉　幾三作詞・作曲
歌：吉　幾三　昭和63年

「あれは歌詞は寂しいけどな、『雨、雨、降れ、降れ』と客席と一緒になって楽しゅう振りをつけるやろ。振りもヒットの一部になったさかいな。寂しさなんか雨で流れてしまうねん。こないして阿久悠は明治以来、3人目の演歌の革命児になったんや」

「はあ、角兵衛獅子。えらいけったいなもんに」

「ちゃうがな。歌の作り方を変えたゆうてんねん。阿久悠は『歌は時代とのキャッチボール』ちゅう信念を持ってたんや。阿久悠以来、 演歌も時代のにおいをぷんぷんさせるようになった。日本はバブルに向かって経済成長する。**『おもいで酒』**(8)のヒロインかてボトルキープしてひとり酒飲んどる。昔の集団就職の少年少女もええ大人になって、いまでは都会の暮らしが当たり前や。ふるさとを想う歌にしても**『北国の春』**(9)にはもう感傷なんかあらへん。あっけらかんとしたもんや。**『北酒場』**(10)は、もうこれはほとんどPOPSや。片や日本の国際化が進んで、東アジア全域が演歌の商圏になった。台湾、韓国のシンガーもぞくぞく上陸してヒットを飛ばしよる。中でもテレサ・テンは今も人気は衰えへん。早うに亡くなったよって**『別れの予感』**(11)は偶然やけど何や意味深やな」

「演歌やおまへんけど、ユーミンとか自分で歌を作る歌い手はんも増えましたなあ」

「そやな。それまで歌は偉い先生が書くもんと決まってたんが、自分で作って自分で歌うことが誰にでも開放されたんや。そういう流行りが演歌にも押し寄せてきよった。吉幾三の**『酒よ』**(12)がそうやがな」

「ははあ、そない考えたら演歌は時代を映してまんなあ」

「せやろ。演歌なんか通俗や、低俗や、と馬鹿にしたらあかんで。演歌をたどれば昭和の歴史が見えてくるんや。ところで、せいやん。町内の大会で歌う歌は決まったんかいな」

「決まりまへんわ。けどな、はっきり分かったことがひとつありまんねん」

「え、そら何やいな」

「やっぱり、ええ演歌は永遠か…、ゆうことですわ」

「なるほど、あんた今日初めてええことゆうた。ほたら、ええ演歌を歌う合唱団も永遠か…な」

（参考資料）

『昭和演歌の歴史　その群像と時代』菊池清麿　アルファベータブックス　2016年

『演歌源流・考』岡野　弁　學藝書林　1988年

『不機嫌な作詞家　阿久悠日記を読む』三田　完　文藝春秋　2016年

Stage 3　君よ知るや南の国の愛の歌

ソレント側から見たナポリ湾。対岸にヴェスヴィオ火山を望む

ようこそレモンの花咲く国へ

チャオ、ボン・ジョールノ！

10月なのに、南イタリアはまだまだ日差しが強いでしょう？だから海も空も底抜けに青いんですよ。どうです、カンツォーネのひとつも歌いたくなりませんか。なにしろ「オ・ソーレ・ミーオ」の土地柄ですからね。

あたし？あたしは歌いませんよ。あたしはこの冊子の表紙にあるような「壁」ですから、寡黙なたちなんで。それより壁には大切な役割がありましてね。夏の昼間は40度を軽く超えるので住人はわれわれ石の壁に囲まれた家でじっとするしかありません。でも陽が落ちるとあとはグルメのお楽しみ。ピザもワインもとびきり上等です。文豪ゲーテ(注) だって、ここがたいそう気に入って、「ナポリを見て死ね」とまで言ったんだそうですよ。

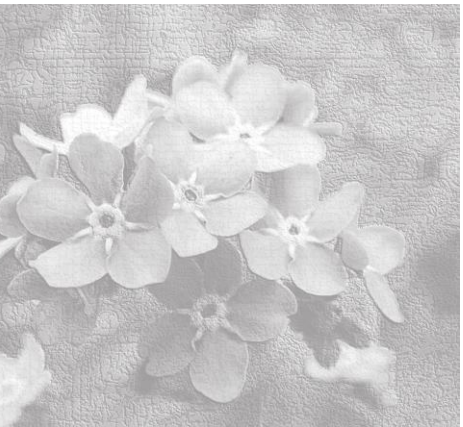
それに、見てください。この眺め。ナポリ湾はきれいでしょう？湾の向こうに見えるのがソレントです。小さな町なのに世界的にも有名になったのは**『帰れソレントへ』**のおかげですよ。1902年に、時の首相が町の視察に来るというのでソレント市長が地元の作曲家デ・クルティス兄弟に作らせたのがこの歌。首相をもてなして市の下水整備事業に国の予算を引き出そうという魂胆だったんです。裏金キックバックとかじゃなくて、歌で「お-も-て-な-し」なんていかにもイタリアらしくて愉快じゃないですか。さてその下水整備はさておき、歌の方はご当地ソングとして町の名前を今に伝えているから市長の仕事として大手柄でしたね。もっともデ・クルティス兄弟の方も、だいぶん以前からの手持ち曲を「できました〜っ」で出してきたらしいんです。在庫品にちゃっかり値をつけた。これもやっぱりイタリアらしい。「おもてなし」だけどちゃんと裏はあったんですね(笑)。

歌の中身と言えば、去っていった恋人に、戻って欲しい、このままでは死んでしまいそう、と切々と訴える悲恋のソングです。でもソレントの風光明媚な眺めや特産のオレンジの香りなど、ご土地ソングとしてのパーツが巧みに散りばめられています。

それから30年あまり、すっかり大御所になっていたデ・クルティス弟が今度は映画音楽を書いたんです。それが**『忘れな草』**（原題：私を忘れないで）です。そのころからイタリア映画はムッソリーニの号令で国策にもなっていったんですね。

(注)ゲーテはイタリアへのあこがれから小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』を書いた。それを翻案して作曲されたオペラ『ミニヨン』で歌われる『ミニヨンの歌』の冒頭「君よ知るや南の国　レモンの花咲く（堀内敬三訳）」は日本でもよく知られている。

ワスレナグサ



その後、映画の方はその名に背いてすっかり忘れられましたが、主題歌は今も健在。パヴァロッティはじめ多くのテノールに歌われています。
これもまた失った恋人を飛び去った燕に見立てて、ぽっかり穴の空いた胸のうちをセンチメンタルに、ときにドラマチックに歌い上げるカンツォーネ。いかにもナポリっぽい調べです。

エンリコ・カルーソ
（1873～1921）

ナポリっぽい歌なら**『海に来たれ』**を忘れてはいけません。歌い継がれたナポリ民謡です。この歌が世界に知られるようになったのは、やっぱりナポリが生んだ有名なテノール、エンリコ・カルーソのおかげでしょうね。カルーソはさかんにレコーディングしたんです。レコードは当時最新ハイテク製品。レコードの普及なくしてローカルの民謡がこれほど知られることはなかったでしょう。
原語では「海の上においで」つまり「船に乗りにおいで」という船乗りが女性を誘う内容。ナポリ男は一日3回は女性に声をかけるんじゃないでしょうかね。なにしろ、マンジャーレ(食べる）と、カンターレ(歌う）と、アマーレ(恋する）は同じレベルの日課ですから。

最新技術といえばヴェスヴィオ火山に登る電車ができたのは意外に古くて1880年。なんと19世紀ですよ。その宣伝のために作られたのがご存じ**『フニクリ・フニクラ』**でした。イタリア語でケーブルカーを「フニコラーレ」というんです。「帰れソレントへ」が世界初のご当地ソングであれば、こちらは世界初のCMソングでした。しかも今も歌い継がれている。ただし肝心の登山電車の方は1944年に山の噴火で破壊され、あえなく廃線。今はもうありません。
陽気なナポリ語で「ヤーンモ、ヤーンモ（行こう、行こう）」と連呼するリフレインは現代でも十分通用するCMソングです。その証拠に、替え歌は星の数ほど。「鬼のパンツ」をはじめとしてね。

ヴェスヴィオ山の
登山電車

カルーソの数あるレコードの中でも最初の曲が**『マッティナータ（朝の歌）』**でした。しかもこれはグラモフォン社にとっても第1号作品で、そのためにオペラ作曲家レオンカヴァッロが書き下ろしました。今でこそ古典的な歌曲ですが、当時の人気作曲家、人気歌手による新譜だったわけです。
『マッティナータ』とはマッティーナ（朝）に窓辺でご婦人に捧げる歌。セーラ（夕べ）に歌うセレナータの逆バージョンです。陽が昇って見えてきたあたりの風景を歌にして、ご婦人の朝のお出ましを乞い願います。「朝の歌」といっても牛乳配達じゃあるまいし、朝からのこのこ出かけていくんじゃありません。前の日から一晩中窓辺にはべって夜明けを待つんですから、伊達男も決して楽ではありません。

レモンの花

寡黙なたち、とか言いながら結構喋りましたね。お付き合いいただいてグラーツィエです。えっ、何です?壁のくせに物知りだねって？いえいえ、あたしのはただの耳学問ですから。ほら、よく言うでしょう。壁には耳があるって。ではでは、チャオ、アリヴェデルチ。

Stage 4

男声合唱組曲
「草野心平の詩から」

作詩：草野心平(1903～1988)
作曲：多田武彦(1930～2017)

秋の夜の会話 (1)

さむいね。
虫がないてるね。
ああ虫がないてるね。

ところで、心平はどうして中国に渡った(2)んだろうね。
どこでもよかったらしいよ。ハワイでも。
たまたま中国だったんだね。
でもその中国で「詩」というものに出会った(3)んだよ。
僕たち蛙がこんな会話してるのもその出会いがあってこそだね。
中国からはたくさんの影響を受けたね。

『石家荘にて』(4)もそうだね。
ああ、あれは昭和13年に新聞社の社長のお供で戦地の視察に行ったときだね。
日中戦争のただなかだね。
日本軍の南下を追って北方の女たち(5)がこぞってやってきた。
それが南北、東西の交通の要所、石家荘(6)だったんだね。
心平は夜の女たちにシンパシーのまなざしを向けているよね。
やるせない人生に寄り添っているね。
愛と憎、誇りと生業の十文字を、東西南北に道が交差する石家荘に重ねているんだね。
戦争はいやだね。

石家荘にて

茫々の平野くだりて。
サガレンの。
潮香かぎし女。
月蛾の街にはいり来たれり。

白き夜を。
月蛾歌はず。
耳環のみふるえたり。

ああ。
十文字愛憎の底にして。
石家荘。
沈みゆくなり。

（昭和十三年）

その戦争が終わって「天」という詩集(7)を出した。
『天』はその中の一篇だね。
天から見れば日本一の山もほんの5センチほどなんだね。
あの広い海もブリキ板に見えるんだね。
そういえば心平の詩にはやたらに「天」が出てくるね。
自分で数えてみたら七割もあったらしい(8)よ。
それも中国の影響だろうね。
ああ、故郷福島の山村では空はこれっぽっちだけど、
中国だと360度全部「天」だからね。
それに人の道としての「天」も中国の思想だし。
「天」はどこまでも畏敬の対象なんだね。

(1)昭和３年に刊行した「第百階級」冒頭に置かれた有名な作品「秋の夜の会話」 で二匹の蛙が冬眠を前にしみじみと会話を交わす。本稿はそれをモチーフとして構成している。

(2)両親との折合いが悪く、日本脱出を試みた。大正10年広州に渡り、嶺南大学に入学。多くの友人に恵まれた。

(3)異国の孤独の中で、兄の遺稿の中に自作の詩を見出し、大いに感銘を受けた。

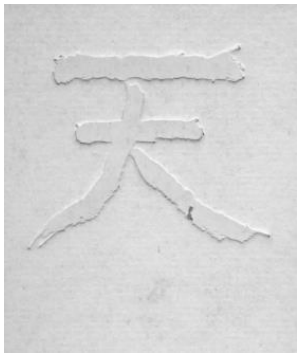
(4)昭和15年刊行の詩集「絶景」に所載。詩作のいきさつは随筆「石家荘界隈」に詳しい。

(5)サガレン(サハリンの旧称)からの海風が届くような北の満州から稼ぎのために大勢が前線をめざした。

(6)北京の南西約300キロにある河北省の省都。三国志の時代から「中原に鹿を追う」と言われた地域。黄土の平原のただなかにある。

(7)昭和26年に刊行。以下の3篇もこの詩集の所載。

(8)詩集{天」あとがきによる。



詩集「天」初版本表紙。（部分）
昭和26年新潮社刊。
西宮市立図書館蔵。
題字は高村光太郎。

天

出臍のやうな。
五センチの富士。
海はどこまでもの青ブリキ。

あんまりまぶしく却ってくらく。
満天に黒と紫との微塵がきしむ。
寒波の縞は大日輪をめがけて迫り。
シャシャシャシャシャ音たてて氷の雲は風に流れる。

人間も見えない。
鳥も樹木も。
出臍のやうな五センチの富士。

（昭和二五年）

金魚

あをみどろのなかで。
大琉金はしづかにゆらめく。
とほい地平の支那火事のやうに。
支那火事が消えるやうに。
深いあをみどろのなかに沈んでゆく。
合歓木の花がおちる。水のもに。
そのお白粉刷毛に金魚は浮きあがり。
口をつける。
かすかに動く花。
金魚は沈む。
輪郭もなく。夢のやうに。
あをみどろのなかの朱いぼかし。
金と朱とのぼんぼり。

（昭和二六年）

『天』のスケールとは対照的に**『金魚』**(9)は小さな池に中国の地平を見ているね。
金魚の赤は地平を赤く染めるはるかな野火だね。
金魚が沈めば野火が消えていくんだね。
ああ、深緑に濁った水の中にね。
見えない水の中は何だか抽象的な空間だね。
その中をぼんやりと赤いものが漂ってるんだね。
ぽつんと落ちた合歓木（ねむ）の白い花も同じようにね。
きっと中国で過ごしたころの古い思い出も漂ってるんだろうね。

(9)かつて中国在住中に北京中央公園でみた金魚のイメージをかいた、と詩人は後に述懐している。『杭州の金魚』（昭和32年発刊の随想集『点・線・天』所載）

『雨』にもまた「天」が出てくるね。
ああ、あれは岩手県の志戸平温泉に逗留したときのスケッチだね。
どうしてそんな山深いところへ行ったんだろうね。
師と仰ぐ高村光太郎(10)が近くにひっそり暮らしていたんだよ。
智恵子さんを亡くして世捨て人みたいになったんだね。
心平は何かと光太郎の世話になっていたからね。
わざわざ雨の中を訪ねて行ったんだね。
雨は天からのメッセージだと感じたんだね。
何千メートルもの高みからのメッセージだね。
そしたらやっぱり「天」の高さ、自分の低さが
身に滲みたんだね。
宿屋の番傘にばらばらとたたきつける雨音が
にぎやかだね。

(10)中国の友人が光太郎の彫刻のモデルをしていた縁で知遇を得て、私淑するに至った。
光太郎が隠棲していた旧居跡は、現在「高村光太郎記念館」（花巻市）となっている。

(11)文字の連なりで視覚的に図像を作って見せる詩作の試み。アポリネールらが始めたものを堀口大學が日本に紹介した。

心平の詩作には視覚的な効果を狙ったものが多いね。
フランス詩のカリグラム(11)の影響だね。
『さくら散る』もどちらかといえばそれだね。
ひらがなの連なりで花びらがひらひら落ちてくるのが眼に見えるね。
だから縦書きでないとね。
盛りの花より散る花の美しさだね。
確かにそうだね。でもこれは戦後の作品だけに、敗戦が背景にあるのかもしれないね。
さくらに日本を重ねたんだね。

(12)昭和15年、中国の汪精衛政権から宣伝部専門委員として招かれ、南京に渡る。そのまま終戦を迎え国民政府軍によって半年間収監され、昭和21年に引揚。

中国暮らしが長いし、終戦を迎えたのも中国(12)だし、外からの眼で日本が見えたのかも。
落花を見るようにね。
いろんなものがはらはらと散っていったんだね。
夢や理想がね。
幻想だったとしてもね。

さむいね。
ああ虫がないてるね。

雨

志戸平温泉第五號の番傘に。
音をたてる。
何千メートルの天の奥から並んでくる雨が。
地上すれすれの番傘に音をたてる。
林檎畑にはさまれた道に。
さうして墜ちて沁みる。
点。
点。
天の音信。
靄が生れひろがり空にのぼる。

（昭和二六年）

さくら散る

はながちる。
はながちる。
ちるちるおちるまひおちるおちるまひおちる。

光と影がいりまじり。
雪よりも。
死よりもしづかにまひおちる。
まひおちるおちるまひおちる。

光と夢といりまじり。
ガスライト色のちらちら影が。
生れては消え。
はながちる。
はながちる。
東洋の時間のなかで。
夢をおこし。
夢をちらし。

はながちる。
はながちる。
はながちるちる。
ちるちるおちるまひおちるおちるまひおちる。

（昭和二四年）

(参考資料)
『草野心平の世界』大滝清雄　宝文館出版　昭和60年
『茫々半世紀』草野心平　新潮社　昭和58年
『支那點々』草野心平　三和書房　昭和14年
『天』草野心平詩集　新潮社　昭和26年
『草野心平　凹凸の道ー対話による自伝ー』日本図書センター　平成6年
『草野心平　わが青春の記』日本図書センター　平成16年
『点・線・天』ダヴィッド社　昭和32年
他